

砂防会館の建設

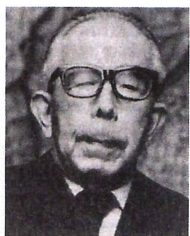
1. 砂防会館建設構想が芽生える

昭和10年(1935)任意団体として設立された全国治水砂防協会は、当初内務省の赤木の執務室を本部としたが、赤木は協会が永続発展していくためには、財源を会費や賛助会費だけに依存するのではなく会館を建設し、運営することにより協会の独立自存の策を樹立する途が最善と考え、末次信正会長に了解を得て砂防会館建設構想に動き出した。

昭和15年(1940)に社団法人となり、東京市赤坂区の三会堂ビルに事務所を置いたが、昭和20年(1945)5月東京山の手大空襲により事務所は焼失した。戦後の昭和25年(1950)10月、理事会で砂防会館建設が了承され、建設が具体化した。旧ドイツ大使館前の角地(現 参議院議員会館)に用地が見つかり、臨時総会で購入を議決し、契約が行われた。

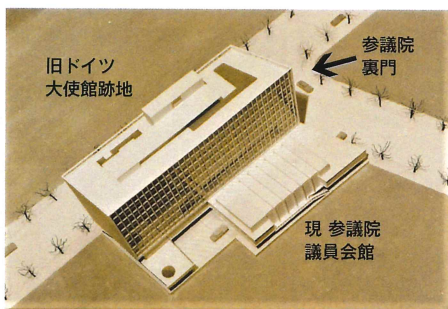
2. 紆余曲折—いろいろな難題—

建設に向けての準備を進めているところに思わぬ事態が起こった。一つ目は、朝鮮戦争に伴う朝鮮特需により、建設用材の高騰と、ビル建設に対する不許可政策もあり、建設着工の延期を余儀なくされた。二つ目は、設計を建築家前川国男に依頼し、地上9階、地下1階建て、3,130坪の設計図書ができ、昭和28年(1953)6月に建築許可願を東京都に提出した。しかし、提出した5日後に国会から土地の譲渡の申し出が行われた。赤木は、「国会で入用なら譲るが、既に会館建設設計画が進んでいることから適当な換地をお願いしたい」と申し入れた。ところが議員立法による「中央機関等施設等整備法案」が提出され、建築許可願書を取り下げざるを得なかった。

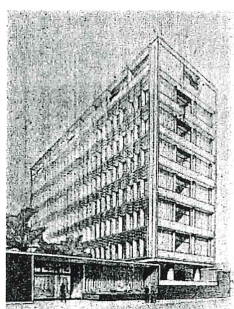


前川国男

明治38年～昭和61年。
日本建築家協会会長。49年芸術院賞。
日本近代建築界のリーダー³⁾
内務省技術第1課長前川寛一の長男⁴⁾



幻の砂防会館 前川国男の当初設計

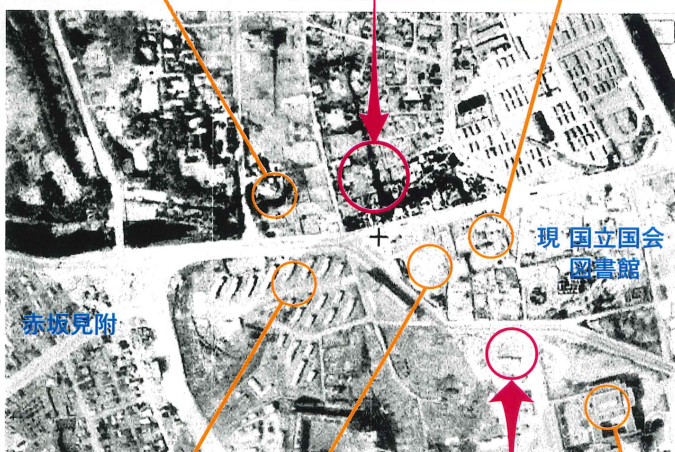


完成予想図 (砂防と治水第6号より)

3. 敷地が決まる

その頃、千代田区平河町2丁目(現 砂防会館)の所有者であった独逸東亜細亜協会の売却意図を受け、参議院はこの土地を購入して砂防協会の所有地と交換することを提案した。昭和29年(1954)、相互無償で交換する協議がまとまり、砂防協会は建設用地を取得することができた。

現 都道府県会館 現 砂防会館 現 町村会館



ジェファソンハイイツ 現 衆・参議院議長公邸 現 自民党本部 旧 砂防会館用地 国会議事堂

砂防会館建設前の千代田区平河町・永田町の様子 (終戦～昭和30年頃)

※国土地理院地図・空中写真閲覧サービスに加筆

国土地理院地図・空中写真閲覧サービス <http://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch.do>

4. いよいよ着工

新しい用地では、建物は5階建てに抑えられ、昭和30年(1955)5月、鉄骨鉄筋コンクリート造、地上5階地下2階、2,355坪の設計が出来上がった。工事費は、自己資金に入居予定のテナントからの借入金、さらに銀行からの借入金金を当て、建築会社との契約も成立、昭和31年(1956)12月、起工式が行われた。

【参考文献】

- 1) 中村正則：戦後史、岩波新書、2008.4
- 2) 宮田章：霞が関歴史散歩、中公新書、2002.7
- 3) 講談社：日本人名大辞典、2003.5
- 4) 赤木正雄：砂防一路、(社)全国治水砂防協会、1963.7
- 5) (社)全国治水砂防協会：砂防協会の至宝、1988.12
- 6) (社)全国治水砂防協会：砂防協会のあゆみ五十年、1990.2
- 7) (社)全国治水砂防協会：赤木正雄先生追想録、1973.9



砂防会館 昭和32年(1957)完成

(一社)全国治水砂防協会所蔵

5. 資金調達が難航

しかし、資金融資の不調に加え、会費からの資金充当やテナントの申し込みが進まなかったことなどの悪条件が重なり、昭和32年(1957)建築会社から「5月末日に完成しても、未払い建築費の支払い方法を協会が明示しない限り、会館の引き渡しを行わない」と通告され、ついに5月末日には、大部分が完成したにもかかわらず、資金不足で会館の引き渡しが行われなかったという事態になった。



昭和31年11月 工事中の砂防会館



昭和32年 完成時の砂防会館(背面から)

6. 打開への奔走

赤木は、河井弥八⁵⁾理事長と砂田重政⁵⁾理事に相談する中で、自由民主党(自民党)が砂防会館を購入する案が浮上したが、既に一部テナントとの貸借契約が成立していたため、赤木は2階・3階を自民党が借用することを提案した。これで建築会社は、テナントの入室を認めることに合意したものの、自民党が正式に会館を借用し、支払いが実現するまではテナントの入室を拒否した。自民党の江崎真澄⁶⁾は、極度の金融引き締め状況の中、銀行からの融資に成功し、建築会社へ支払いを行い、昭和32年(1957)7月建築会社から砂防会館の鍵を受け取ることができた。後に江崎氏はこの状況を「私は砂田先生のもとにやっと小切手を届けることができた。その時の砂田先生の喜びようは大変なものだった。また、呼ばれて飛んでこられた赤木先生は、小切手を手にすると砂田先生と私の手を握って声をあげて泣きだされた。」と振り返っている⁷⁾。当面の危機を脱した砂防会館の開館式は、昭和32年(1957)8月、完成したばかりの「砂防ホール」で開催された。因みに、2・3階に入居した自民党は昭和41年(1966)、永田町に本部建物が完成するまで砂防会館の居室を本部として使用することになった。



河井弥八

明治10年～昭和35年。
貴族院書記官長、侍従次長兼皇后宮大夫、
貴族院勸業議員、参議院議長(ほか)⁵⁾
砂防協会副会長⁶⁾



砂田重政

明治17年～昭和32年。
弁護士、衆議院議員、防衛庁長官、
総務会長³⁾ 砂防協会副会長⁶⁾



江崎真澄

大正4年～平成8年。
衆議院議員、防衛庁長官、自治相、
通産相、総務長官³⁾ 砂防協会理事⁶⁾

7. 借入金返済と完済

昭和32年(1957)8月の臨時総会で、「かかる立派な会館を他に譲ることなく会員の自力によって保持しよう」という声相次ぎ、建設費残金の半分を会員から借り入れ残り半分を銀行から借り入れることを決議した。その後、貸室料や貸会議室使用料の収入が入ってきたことにより、会員からの借入金は昭和42年(1967)3月、利子も含め予定通り全額返済を完了することができた。『砂防協会維持の財源を会費に依存することなく、協会の独立自存のために砂防会館を建設する』という理念はこうして実現し、赤木は、会員の惜しみない協力が最も嬉しい出来事であったと述懐している。「会員が造った砂防会館」は誇らしげに燦然と輝き、街の風景として品格のある姿と静かな佇まいは、砂防の進展の舞台として幾多の出来事を見守っていくことになった。



砂防会館正門と大宮森次による題字